



Title	第5回臨床哲学フォーラムへの感想文：研究が人を傷つけてしまうこと
Author(s)	Trin
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 第5回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「人の生と研究をめぐる倫理」

第5回臨床哲学フォーラムへの感想文
研究が人を傷つけてしまうこと

Trin

第5回臨床哲学フォーラム（あたらしい倫理学）「人の生と研究をめぐる倫理」に福祉系私立大学研究推進部門の職員として参加した感想を記す。

- (1) 今回のような研究のあり方について考え、問い直す場は大切であると感じた。本学でも可能な範囲で問う機会をつくっていきたいと思った。
- (2) 他者をネタにすること：大学教員が自己の出世を第一目的として研究を進めること、そのために他者をネタにすることは倫理的に批判すべきであるが、他者をネタにすることそれ自体を問題にすることは難しいと感じる。自己の目的のために他者を手段として利用することは、人間は関係の中で生きているため避けられない。どのような場合に、他者をネタとしてはいけないのかを原則化することも難しそうである。
- (3) 研究も哲学もだれもが自由に行うべき行為だと私は考えているが、研究倫理は主に大学教員を対象につくられている。大学教員の特権性を意識して研究倫理を抑制的なものにすると、研究や哲学を人々が行う際の敷居が高くなりマイナス面はないか。
- (4) 人々を研究の対象にすることが課題ならば、教育の対象とすることを課題とする考えがもっと語られてよいと感じる。
- (5) ロボット発言事件：「研究のコミュニケーションがもつ無配慮」を課題にするよりは、「考えたことの表明の自由が奪われること」を課題にした方がよいように感じる。なお、今回の発表で、当時の研究室の文脈に照らして発言をとらえ直そうとされた試みは有益なものと感じた。
- (6) 世界の中でAと名付けたり、「AはBである」と表現したりすることは、区別を生み出す。そして、区別を快く思わない方から差別ではないかと感じる声があがる。しかし、それは「みんなちがってみんないい」が実現できていない社会や私たちの意識の課題ではないか。社会の課題は言語化して改善したほうがよい。私たちの意識については、心理的安全性のなかで行われる「てつがくカフェ」のような場で語りあい、お互いのすれ違いを認める努力、自らの偏見への気づきを続けるしかないのではないか。
- (7) 今回のような哲学対話が組織の活性化や研究倫理の実質化に有効だと感じ、哲学を学んだ方が専門性を活かせる場を社会のなかにつくると有益な気がした。研究者にならなくても、イノベータやファシリテータ、コンプライアンス担当者などとして活躍

する哲学専攻学生が出てきたらおもしろい、と本番終了後の雑談トークで感じた。

研究の自由、研究の立場性、哲学対話の有益性と楽しさをふまえつつ、研究が人を傷つけてしまうことをどう防いでいけるかを、研究倫理委員会事務局職員として、考え、取り組んでいきたい。

(とりん)